

龍虎の鏡

令和6年9月14日(土)～令和7年3月9日(日)



兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

想像上の生物である龍と実在する動物の虎を組み合わせた「龍虎」の図像は、古くから数多くの絵画や器物等に表され、現在もモチーフや表現として色褪せません。漢時代(紀元前202年～紀元220年)の銅鏡では瑞獣※として龍や虎の図像が登場します。当時の思想を背景に鏡の紋様が創作されていくなかで、龍と虎は向かい合い、また神仙の傍に並び立つなど、「龍虎」の図像は様々な姿をみせていきます。 ※瑞獣：めでたい兆しを示す獣

鏡に現れた向かい合う龍虎



図1 鏡の中で向かい合う龍虎

※盤龍鏡【後漢】(当館所蔵/158)

龍と虎が向かい合う図像は、後漢時代前期(1世紀中葉～後葉)の「盤龍鏡」の主紋として表されます。写真の盤龍鏡(図1)では、左上の虎、右上の1本角の龍が互いに噛みつかんばかりに開口し、顔を向かい合わせています。しかし、虎は首から肩部分だけの表現で、鈕の左右と下からのぞく足や尾は、鱗を持つ龍の体となっています。龍の足先は2本指で、指先には人間と同じような爪が表現されています。

神仙世界に現れた龍虎



図2 西王母の左右に並び立つ龍虎

※画像鏡【後漢】(当館所蔵/151)、左：内区主紋(部分)

後漢時代、1世紀末以降に登場する画像鏡には、不老不死を司る西王母と東王父(東王公)という陰と陽の対をなす神仙を表すものがあり、龍と虎はそれらの傍に並び立って現れます。図2では西王母の左右に龍と虎、図3では東王父の前方に重ねて表した龍虎(手前に仙人が騎乗する龍、奥に舌を出す虎)がみえます。

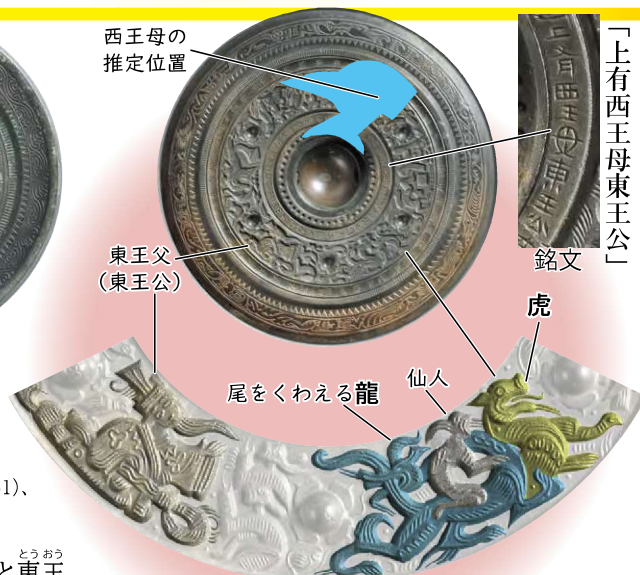


図3 東王父の前方に並び立つ龍虎

※画像鏡【後漢】(当館所蔵/146)

上：着色部分は後世の補修箇所
右：内圈銘文(部分) / 下：内区主紋(部分)

1. 龍虎の組み合わせと辟邪の役割

中国最古の龍虎の表現は、西水坡遺跡（河南省濮陽）の約6,500年前の墓で発見され、被葬者の左右に貝殻を敷き詰めて象ったものでした。以後、龍と虎は様々な器物に表され、銅鏡としては前漢末～新時代（紀元前1世紀後葉～紀元1世紀初め）の獸帯鏡（図4）に瑞獣として登場します。また方格規矩四神鏡では、龍と虎は陰陽五行思想を背景に特別視された四神の青龍と白虎としてそれぞれ東西に配置され、陽を示す日像と陰を示す月像を掲げる姿もみられます（図5）。銘文には、朱雀・玄武が「陰陽調和」、青龍・白虎が「辟邪（魔除け）」の役割をはたすことが記されています（図6）。

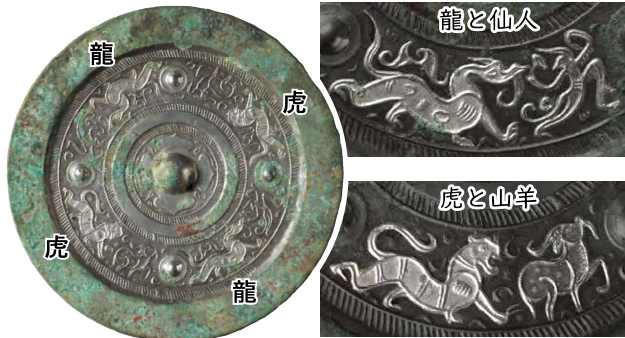


図4 龍と虎が交互に表される獸帯鏡
※獸帯鏡【前漢】（当館所蔵/115）、右：内区主紋（部分）

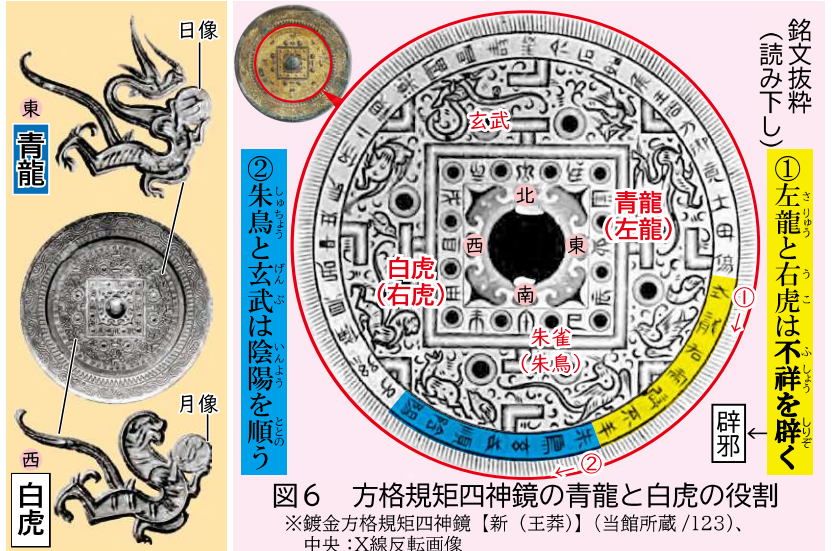


図5 日像を持つ青龍と月像を持つ白虎
※方格規矩四神鏡【新（王莽）】（当館所蔵/132）、白黒画像

図6 方格規矩四神鏡の青龍と白虎の役割

※鍍金方格規矩四神鏡【新（王莽）】（当館所蔵/123）、中央：X線反転画像

2. 対向する龍虎の登場

後漢時代前期（1世紀中葉～後葉）になると、官営の鏡工房から自立し始めた鏡工（制作工人）達は、鈕座に「盤龍紋」をもつ浮彫式獸帯鏡を新たに制作します（図7）。盤龍紋は、主に龍と虎が鈕の下から上半身をのぞかせて顔を対向させる浮彫表現の紋様です。ひとつの図像に表した龍虎の威力による辟邪のはたらきが期待され、後にこれを主紋とする盤龍鏡も創作されました（P1図1、図8）。盤龍鏡には、龍と仙人が対向するもの（図9）や、西域に由来する「辟邪」・「天禄」という名の有角の奇獣が対向するもの（図10）など、龍虎のほかにも様々に創意された意匠があります。

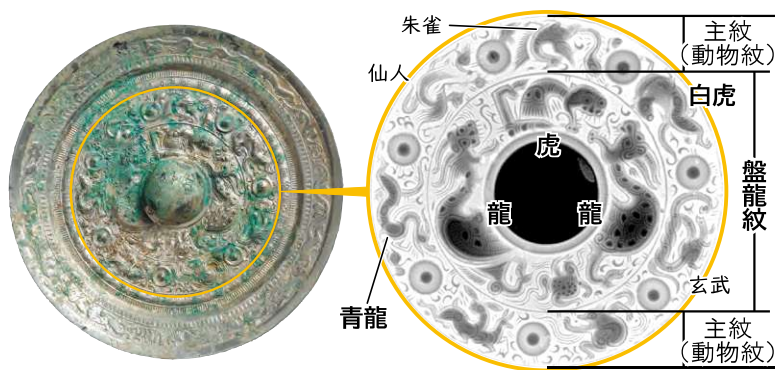


図7 鈕座に表された盤龍紋の龍虎
※浮彫式獸帯鏡【後漢】（当館所蔵/144）、右：X線反転画像



図10 対向する辟邪と天禄

※獸紋帶盤龍鏡*【後漢】
（名古屋博物館所蔵・画像提供）、上：内区（部分）、加筆



図8 主紋となった対向する龍虎
※盤龍鏡【後漢】（当館所蔵/161）、右：X線反転画像



図9 龍と仙人が対向する盤龍鏡
※盤龍鏡【後漢】（当館所蔵/159）、左：内区主紋（部分）

3. 神仙世界における龍虎の姿

西王母は不老長寿をかなえる神仙として民衆の間

で信仰され、その図像が紀元前後の方格規矩四神鏡に登場します。後漢時代の紀元80年代になると、この方格規矩四神鏡を下地とした画像鏡が江南地方（長江下流域南部）で創作されました。そこには女性神の西王母に男性神の東王父の図像が加わり、陰陽二神を中心とした神仙世界の様子が表されています。陰陽調和の役割は、西王母・東王父が朱雀・玄武に取って代わり、辟邪の役割をもつ青龍・白虎は、陰陽二神を守護するように傍に並び立つ姿で表現されています（P1図2・3）。



図11 四川新繁県清白郷一号墓出土画像磚にみえる西王母と龍虎座

※「四川 新繁 西王母画像」*【後漢】（京都大学人文科学研究所蔵・拓本画像提供）、画像一部調整、加筆

図の画像磚は墓葬の装飾に用いられ、龍虎に座する西王母を中心に三足鳥や九尾狐、仙薬をつくる兔など様々な従者がとりまく神仙世界を表す。

一方、四川地方周辺（中国南西部）でみられる神仙世界の図像に特徴的なのは、正面を向く西王母が龍虎に座る姿、「龍虎座」の表現です（図11）。西王母を守るように両脇から龍と虎が上半身をのぞかせる龍虎座は東王父にも表され、2世紀以降に同地方で創作される神獸鏡に認められます。そして龍虎のほかに、鳥頭や虎豹形の別の獣も両脇に控える姿に表されるなど（図12～14）、龍虎座表現は紋様伝播や中国東部に移動した鏡工の影響を受けて変容します。また、龍虎に座る神仙も変化し、琴の演奏で陰陽調和を助ける伯牙も一例です（図15）。江南で創作された重列式神獸鏡では、平和の徴であり長寿を司る南極老人（文獻1）が龍虎に座り、青龍・白虎を含む四神や伯牙等も別に表し（図16）、龍虎が守護する

神獸鏡に表された龍虎座と神仙（図12～16）

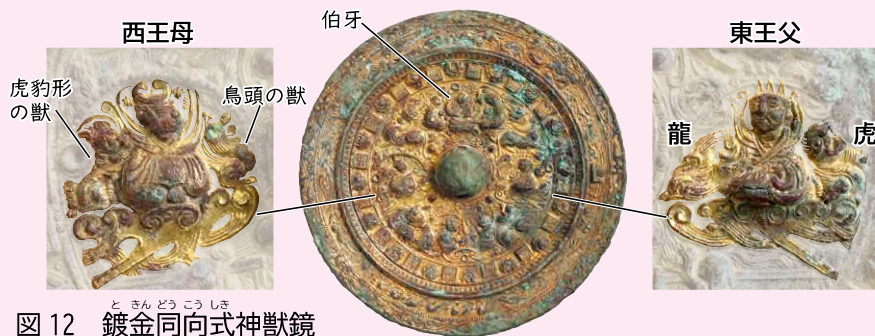


図12 鍍金同向式神獸鏡



図13 鍍金対置式神獸鏡



図14 環状乳神獸鏡



図15 銘帯三段式神獸鏡*



図16 重列式神獸鏡

※図12～14・16：【後漢】（当館所蔵／順に156・155・152・141）、

図15：【後漢】（名古屋市博物館所蔵・画像提供）、いずれも画像一部抜粋、加筆。

4. 隋唐鏡の四神と十二支の龍虎

漢時代に文字で表された十二支は、隋～唐時代初頭(7世紀初め)に登場する四神十二支紋鏡(図17)では動物の図像で表されるようになります。四神と十二支は神性を帯びて周りに雲気が漂いますが、四神の青龍・白虎には足の長い毛や肩口の火焰状の翼などの特殊な装飾があるのに対し、十二支の辰・寅の図像にはなく、寅も首が短く実際のトラのようであり、同じ龍と虎でも四神と十二支で神格性に違いが窺えます。



図17 四神十二支紋鏡の龍虎
※【隋-唐】(当館所蔵/184)

5. 龍だけが表された鏡

唐時代の盛唐期(8世紀前半)には、鏡の紋様に虎の姿は見られなくなり、雲龍紋八花鏡(図18)のような龍紋を単独で表す鏡が盛行します。龍紋の鏡は邪を避け万物を映す鏡とされ、皇帝玄宗(位712～756)が千秋節(玄宗生誕日)に「千秋鏡」として群臣に下賜しました。また、揚州(江蘇省揚州市)より皇帝に献上された特製の銅鏡には龍紋が表され、「天子の鏡」として当時の人々に知られていました。

龍紋の鏡が皇帝にまつわるのは、古代中国の占い『易経』乾卦の言葉「飛龍、天に在り。大人※を見るに利ろし。」に基づき、龍紋が皇帝・天子(=「大人」)の象徴である「飛龍」を表したためと考えられます。 ※大人：大きな徳をそなえた聖人・聖王



図18 雲龍紋八花鏡
※【唐】(当館所蔵/283)

龍を取り囲む飛雲紋は、天に昇る「飛龍」に依じて現れた「景雲」(めでたい兆しを示す雲)の表現とみられます。



図19 交頸双龍紋鏡
※【唐】(当館所蔵/282)

二体の龍が首を絡めた交頸の表現をとる特徴的な鏡です。「夫婦和合」の吉祥を表すオンドリの図像にも交頸表現があり、龍にも同じ効果が期待されたのかもしれません。

◆ 龍虎図を読み解く言葉「雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ」◆



図20 龍虎図屏風※【雪村周繼筆/室町】
(クリーブランド美術館所蔵)パブリックドメイン

『易経』乾卦「文言伝」には、「雲従龍、風従虎」という言葉があり、万物は同類同士で相互に感応する関係にあることをたとえています。古代中国では龍と虎は同列に扱われ、雲と龍、風と虎がそれぞれ同類同士で相応じる関係性にあるという普遍的な観念があったことが窺えます。これを踏まえて前漢時代の思想書『淮南子』天文訓では、万物のはたらきとその結果の関係性を説明するたとえとして「虎嘯きて谷風至り、龍挙がりて景雲属る」(虎が吼えたと谷風が吹き、龍が天に昇ると景雲が集まる)と表し、龍と虎の行動がそれぞれ雲と風を起こすとししました。逆に『漢書』王褒伝では、「虎嘯きて風冽く、龍興りて雲致す(虎嘯而冽風、龍興而致雲)」と表して龍と虎がそれぞれ雲と風に迎えられたと捉え、よい時機にめぐりあうことで優れた君臣は奮起して栄えることをたとえました。そして南宋画家の牧谿が描く『龍虎図』には、この言葉をもとに「虎嘯而風烈」、「龍興而致雲」の題(画賛)が記されました。牧谿の龍虎図は中世の日本に伝来し、龍虎図屏風(図20)のような雲龍風虎を表現する日本絵画の原点となりました。『易経』の「雲従龍、風従虎」の言葉と紡ぎ出された観念が龍虎図の基層にあり、今も色褪せない龍虎のイメージに繋がっています。

【凡例】作品名に※を付すものは、本展では画像表示のみで実物展示していない。/ 当館図録『千石コレクション—鏡鑑編—』の掲載番号を所蔵の後に示す。/ 垣内拓郎(当館学芸員)が担当作成した。【出典】文献1：林巳奈夫1989『漢代の神祇』臨川書店【謝辞・協力】協力機関：京都大学人文科学研究所、名古屋博物館、The Cleveland Museum of Art/協力者：坪倉ひとみ、森下章司、(敬称略・50音順)